14. 金澤屋の女性たち

400 通近い平野家書簡のなかで、年月未詳で差出受取人も欠損した女性の執筆と思われる、ほとんど平仮名による興味深い書簡【64】がある。「…おまいさまおんはじめこかないさまみなみなごきげんいかニや、おんみのうへたいせつにおんまもりくだされたく候、わたくし事も、とうねんはるからぶらぶらとやすみおり、旧七月ゟとこにつき、このよでなきひとニあいたり、このちのひとニわかれまでいたし、川原田ゑまいりおり候ところ、十八日のひに、たしかおまいのすがたとみゑましたから、よばりたきわやまやまなれど、じぶんのみもかなわず、こゑもとどかず…てがみあづけおき、それもとどいたるものやらとどかざるものやら、なんのごへんじもこれなき…つるとゆうひとまいり、わたしもいくからゆこと、旧十一月一日のひに、わざわざくるまにていづもやかたゟまいり、もりさんにあい、おまいをたずねること、ろぐみのところゑもりさんハしんばいまいつたとまうし…」という内容である。ここには「川原田」との地名があるので佐渡の地であり、また病気のことが書かれているので、源之助の妻になった田中リンが源之助へ宛てた書簡ではないかと思われる。

「田中リン」は 1873（明治６）年 11 月 12 日、新潟県佐渡郡河原田諏訪町 141 番地で、父田中善三郎・母ヨシの二女として出生し、1899（明治 32）年９月５日に源之助と結婚し、1902（明治 35）年９月３日、出生地において 28 歳で亡くなっている。「…わたくし事も、とうねんはるからぶらぶらとやすみおり、旧七月ゟとこにつき、このよでなきひとニあいたり、このちのひとニわかれまでいたし…」と言っているので、田中リンは病気でも結核で亡くなったと伝えられていることと重なっている内容である。

年未詳で差出人名はないが結核ということで、たよから清三郎宛て７月 21 日付書簡【232】には、「…つね事も誠に誠にむつかしきよふすニて御座候、ついてハ、たん（痰）にち(血）うみのよふなで、又ハち（血)ばかりも出候付、私ニてもさすそく（早速）かいたくとぞんじ候て候へども、誠にひま（暇）どれ申わけもこれなく、此たん（段）御あしからずねがへ候、又つね事もふせりたりおきたりいたしをり候、どふぞどふぞばゞさんにも御しらせ下されまじくよふ申上候…」という内容で、「つね」という人物が痰に血が混ざり結核の症状のなか「…つね事もふせりたりおきたりいたしをり候…」という。「…どふぞどふぞばゞさんにも御しらせ下され…」という「ばゞさん」を祖母ふきとすると 1907（明治 30）年４月 11 日に亡くなっているので、「つね」という人物とは祖母ふきが亡くなる前に関わっていたと考えられる。同じように「つね」の結核の書簡【68】には「…つね事いろいろこまこま御手紙御送り下され、つね事初一同大悦び御座候、誠に誠にあり度御礼申上候、猶又、つね事源之助ゟ御はなし申上候事とぞんじ、別段手紙差上申さず候らへども、つね事もせキ出又いきゝれいたし、誠に誠にこまり入候、しんばし初ミなミな様一同相だんいたし、多カギさんニねがう事ニ候処、多カギ先生の御子さん、ばひふうと申病キニ相かゝり、しんさつなりがたく候付、今日惣左衛門殿とがいと申先生へ、しんばしおとく殿ゟ御手紙いたゝき、ねがへ出候付、私ニても大金をつかへ、宅ニていろいろしんばへニ相成…」とある。「つね」の病状はまだ軽いようで「…せキ出又いきゝれいたし、誠に誠にこまり入候、しんばし初ミなミな様一同相だん…」とあるので、新橋の福原有信・徳らに相談して高木兼寛医師の診察を受ける予定となった。だが高木が不都合となり「とがい」という医師に変わったいう。でも結核となれば入院となり「…大金をつかへ、宅ニていろいろしんばへニ相成…」となったのではないか。なお、高木医師が個人医として東京病院を開設したのが明治 24 年なので、この書簡はそれ以降と思われる。

二つの書簡の内容から明治 25 年から 30 年初めの期間に結核になった「つね」とは、一体誰のこ

とを指しているのであろうか。書簡【68】のなかのたよの言葉は、「…先日つね事いろいろこまこま御手紙御送り下され、つね事初一同大悦び御座候、誠に誠にあり度御礼申上候、猶又、つね事源之助ゟ御はなし申上候…」と「つね」に対して温かく対応し入院をさせたと思われる。書簡【232】では、「つね事」の病状が悪化しているので、「…私ニてもさすそく（早速）かいたくとぞんじ候て候へども、誠にひま（暇）どれ申わけもこれなく…」と、結核の「つね」の扱いにたよは困っている様子が見える。

金澤屋が懇意にしている根本の若佐家に「リン」がいる。田中リンの「リン」を「倫」という漢字を使うと、「倫」は「つね」とも読むので、たよは清三郎宛ての書簡には「つね」としたとも考えられる。もし、「つね」が田中リンとすると、結核を患っている女性との間で源之助は婚約関係を結び、後にリンを日本に置いたまま、渡米したことになる。前述した年月未詳で差出受取人不明の女性の書簡【64】が、結核療養のため佐渡の実家に帰っていた田中リンの言葉とすると、源之助はなぜリンに不誠実な態度を取ったのであろうか。リンが源之助の行方をさがすために、佐渡の指導者である森知幾とも接触していることを考えると不思議である。

なお、佐渡の小布施村にてと記した早川角太郎から清三郎宛ての年月未詳書簡【44】には、「…御令息源之助様ハ、当地へ商用ニ御出ケニハ相成不申候や、ツネも御相談致度義有之候間、一先御来駕為致候テハ如何御座候、何レ委細ハ真中萬二申上候、源之助様ハ何方ニ御滞留仕候哉…」という一文があり、「…ツネも御相談致度義有之…」と、「ツネ」という人物名が書かれている。書簡には不鮮明な印の一部に「能代」と読めるところがあるので、早川角太郎という能代港町の人物が佐渡に商用で来た際に清三郎に出したものだろうか。いずれにせよ、この「ツネ」という女性が関係あるとすると、源之助との出会いは佐渡と限らないうえに清三郎も知っていた可能性がある。戸籍では出生地に死亡を届けた記載になっているが、根本東墓地の金澤屋一族の墓域には「佐渡国河原田町　田中家産　源之助妻俗名リン行年三十一」と刻んだ墓が確認されている。

1849（嘉永２）年生まれのたよは、16 歳で４歳上の清三郎と結婚し、すぐに長男源之助（1867 年）が産まれている。二男仲治郎の後 1876（明治９）年長女らくを、また三男四男の後の 1882（明治 15）年に二女ふきを、さらに五男の後の 1890（明治 23）年、41 歳の時に男５人女３人の末子になる三女ひでを産んでいる。書簡から金澤屋の女性たち、長女らく、二女ふき、三女ひでの姿を追っていきたい。

長女らくは兄の源之助や仲治郎と、それぞれ 9 歳４歳と離れているものの、彼らの生き方を身近で見ていたし、それなりの影響を受けたと思われる。「小谷らく」は根本小学校を卒業すると、二人の兄がいる東京で過ごしているが、その頃源之助は佐渡方面など金澤屋の販路拡大に奔走していた。仲治郎は金澤屋の仕事を手伝いながら水産伝習所に通い始めた時期で、一緒に住んでいたようにみえない。多分、らくは東京の森惣右衛門宅か、親戚に間借りしていたのではないかと思われる。らくに家事見習いの奉公の話があったことが仲治郎の書簡【79】に見える。その後の清三郎と親しい山崎峯次郎からの書簡【25】には、14 歳のらくが病気になったものの快復して受検するとの記載があるので、東京のどこかの女学校を受検したと推察される。らくの女学校時代に関わる書簡は今のところない。卒業して故郷の根本に帰ったと思われる 1894（明治 27）年、この１年間は金澤屋を手伝って、翌年親が薦める結婚となったのではないかと思われる。女学校を卒業する前後から金澤屋を手伝った時期に、金澤屋では商品取引や金銭貸借のことで極めて重大なことが起った。19 歳のらくは、1895（明治 28）年５月９日に「安房郡富崎村布良千三百三番地　星野富平妻ニ嫁ス」と戸籍にある。根本の隣の富崎村布良は金澤屋の出先機関があり、採鮑業や乾鮑製造と商取引において深

い関係をもっていた場所である。

結婚直後、らくは両親宛に「…良家ニ嫁し、妾が幸福之に過きたる事之なく候、母上様ハ□明の御婦人ニおわしまし、実に文明の母とも申べき御方…母上様ニ幸をつくし、夫ニ貞操をつくし、御両親様の御尊意を安せん事をねんじ」ていると書簡【353】を出している。兄の仲治郎が平野家の婿養子になった時期に、日清戦争勝利の世情のもと大都会東京で過ごしていた女学生のらくが、浮き沈みのある海産物問屋金澤屋の経営を心配していた時期である。清三郎・たよの意向を酌んだ結婚であったであろうし、姑を「文明の母」と言って安心させている。その後、たよ宛に断片的な書簡【332】ではあるが「□□楽な様でもままにならないのは嫁の身（欠）す、…□□ぞよろしくいひわけをして下さい」と意味深長な言葉が綴られている。４か月後の９月 11 日、「安房郡富崎村布良千三百三番地第八号 星野富平方ヨリ離縁帰ス」と記載されているが、らくには一体、何があったのだろうか。その後のらくの生き方は後述する。

次に「小谷ふき」のことを紹介する。実は、たよの祖母である土佐五三郎の二女もふきという。祖母「ふき」は 1806（文化３）年出生し 1897（明治 30）年に 92 歳で亡くなっている。書簡では金澤屋の家族への挨拶に「御老母」「ばあさん」「ぼうさん」などと書かれている人物である。ふきが喜寿（77 歳）になった 1882（明治 15）年、清三郎・たよ夫婦の三女ふきは生まれ、祖母と同じ「ふき」という名をつけた。三女ふきのことは大島四郎著『安房の潮左為』に全く書かれていない女性なので、仲治郎は妹ふきの存在を大島に語らなかったのであろうか。妹ひでとは対称的な扱いを受けている。

22 歳の三女ふきは、戸籍によると 1904（明治 37）年 12 月 27 日に東京市小石川区小石川久堅町 20 番地の伊東祐寿と結婚している。ふきが父清三郎宛に出した書簡は３通あり、結婚後のものである。１月 29 日付書簡【22】では「…ニ米国ゟ十一月頃小かはせ参るはずの今だ何んのたよりなく、誠ニ誠ニ気かもめて気かもめてこまり入候…」とあり、誰からの小為替送付かはわからないが、夫の伊東祐寿かもしれない。欠損の多い１月 28 日付書簡【62】は「…隣家星川［　］藤七なる大学［　］今回博覧［　］際し却［　］参訪問者［　］き為め、勉強［　］出来［　］につき郷里の妾宅、本月二十九日より二週間位借間致度候と申され候…」と、東京帝大４年星川藤七が博覧会（1907 年（明治 40）年 3 月 20 日から 7 月 31 日の東京勧業博覧会と思われる）期間中、勉強のため東京の自宅を避けて、清三郎宅を借間したいとの依頼である。２月４日付書簡【242】は、１月 29 日付書簡の米国より小為替が未着であったが、「…米国の為替（カ）□□手紙参り、金子百円まゐ□□（欠損）候故、何卒御安神下され度候…」という報告で、２通の書簡はいずれも 1907（明治 40）年のものである。

なお、差出人の字体がふきと思われる書簡が３通あり、渡米に関わる貴重な内容が書かれている。年は不明だが 10 月 14 日付書簡【13】は、伊東宅前にある「学校より火事」がでたので火事見舞いの手紙を要望している。ふきの結婚前の 10 月５日付書簡【24】には、「…姉上様には御無事御渡米之由、誠に目出度祝し上参らせ候、然るに兄事渡米ニ付てハ一方ならぬ御尽力下され、御蔭さまニて是れ迄の運びニ相成候も、御父上様の御かけと深く御礼申上候、尚ほ御礼申上候も筆紙に尽しがたく一生忘れ申間敷候、末筆ながら御母上様へも御同様御礼厚く申上候…」という重要な内容で、娘ふきが源之助の後妻ふくの渡米を祝福するとともに、兄源之助の渡米に対して両親に「筆紙に尽しがたく一生忘れ」ることはないといっている。その文言の背景には何か意味あることが隠されているのか。後妻ふくの渡米はふきの結婚の年の 1904（明治 37）年８月 16 日なので、10 月５日付書簡になったのだろう。４月 22 日付書簡【227】はふきの結婚後、1905（明治 38）年の４月東京・小石

川の伊東家の姿や義母との関係が書かれている。また「…近い内ニ若松町之姉上様之仕事など致し度と考へ居り候…」と、姉らくとともに裁縫の仕事をしたいとか、「…米国より便り有之候…」「…来る秋頃ニは東京見物ニでも御出で被下度、旅費は又私が仕事でも一心に致して、御送り申べく候…」と、姉らくとの交流のことや、ふきなりに両親を気遣っている。

ふきの嫁ぎ先である伊東家の縁者や義母からの書簡が数通あるが、義母から金澤屋にいるらく宛て２通のうち書簡【26】をみると、仲治郎が米国から帰国した 1906（明治 39）年 11 月 27 日以降、翌年３月頃の「…米国人の舟ちんほつのよし貞めし御近所ハにきやかニ御座候と存候、しかし仲次郎様ニハよき折御帰国被遊候…はくらん会も日ぢかく相成候…」などのダコダ号遭難事故や東京勧業博覧会のことが書かれ、もう一つの書簡【27】では、「…仲次郎様の手つま（手品）の咄しに、清兵衛さんの米国咄し…」とあって、伊東の義母が根本の清三郎宅にいたことがわかる。そして、年月や差出受取が未詳であるが、内容からみて義母かららく宛てと思われる書簡【136】では、「…此程ハ長々御世話様ニ相成、殊ニ見る物事めつらしく、此上もなき楽しみいたし…御両親様・仲次郎様ニも御やさしく被遊を、米国の色々替りし御咄し伺ひ…」とあり、根本に長逗留したことや前述の２つの書簡に書いたこと、「…留守中も何事もなく、おふきハ間ニ合くれ候間、私ニ取てハしつニしつニしつニ嬉敷存…」と述べている。

ふきに関わって重要な書簡がある。今のところ調査中であるが、ふきの夫「伊東祐寿」の名を出している別所良之輔から清三郎宛の 10 月 31 日付書簡【110】である。内容は「…一昨夜伊東祐寿氏モンテレーヨリ本月三日発の書状拝見致し、御姉上様共ニ無事御安着之由、何より御目出度大賀之至ニ存上候、尚小生ニ関シ在米御両兄ニ御話シ被下候由、身ニ余て感謝奉候…」と、別所は米国モントレーの伊東祐寿からの書状を見て、「…御姉上様共ニ無事御安着之由…」とは 1904（明治 37）年８月 16 日に源之助の後妻ふくが渡米したことであろう。伊東祐寿とふきは結婚前であるが、伊東はすでにモントレーにいる源之助・仲治郎兄弟と知合いであったのではないか。また、「小生ニ関シ在米御両兄ニ御話シ被下候由」とあるので、伊東の書状に清三郎から別所のことを聞いたとの記載があり、そのことでの源之助・仲治郎から話しがあったと書いてあったとすると、別所は渡米について伊東をはじめ清三郎を通じて、源之助・仲治郎にコンタクトをとっていたのではないかと思われる。

夫を祐寿君と呼ぶ井上庄兵衛と思われる人物（義母の兄）が清三郎と仲治郎宛に２月３日付書簡【313】を出し、「…伊東氏御家内トモ篤ト協議致候処、祐寿君不在中貸間デモセバ、地代位の所ハ収入可有之様申…」とあり、わざわざ「祐寿君不在中貸間」でもおこなうと収入があるといった背景には、渡米中という長期間の不在を想定しているのではないかと推察される。ふきを姉上様と呼んでいる勝太郎は仲治郎宛に７月 19 日付書簡【230】で、「…御老人様御病気、其後如何に候や…姉上様も御相談□（欠損）願申し上げ、兄上様御帰国迄、当分姉上様方江同居致し度候…」と、清三郎の病気のことから明治 39 年から 43 年の間、伊東祐寿が渡米中、勝太郎は伊東祐寿・ふき夫妻宅に同居したと思われる。井上庄兵衛の娘と思われる勢以子の１月元旦付書簡【82】では、「…私之身ニ取ても、御遠方ニ居らると如何御暮しニかと夫れのみ心ニかゝり居候得ば、何卒一日も早く御帰宅遊ばされ候…」と、伊東の義母は 1907（明治 40）年の正月は根本の清三郎宅に滞在していた。そして、らくと思われる人物が勢以子の出産手伝いに関わっていた書簡【117】などがある。

らくとひでの姉妹は漁村の女性として教育を受けていたとともに、男尊女卑の風潮に向き合うなかで、キリスト教信者や宣教師たちとの出会いもあった。明治期にあって多様な考えにふれながら、自己の生き方をさぐっていくことになる。

離婚後のらくは根本・金澤屋に戻って、母たよや祖母ふきと暮らすことになる。『長尾村誌』「根本尋常小学校」の項「教員の移（異）動」の中に「小谷らく」の氏名があり、「就任 明治 33 年５月」「退職 明治 39 年３月」「訓導（専）」「備考 34 年５月代用教員　36 年９月専科教員」と記載があるので、1900（明治 33）年５月に 24 歳のらくは代用教員として根本尋常小学校に採用されている。それとともにこの年６月に清三郎は学務委員になり、三女ひでは５年生（10 歳）として在学していた。

この時期、根本尋常小学校には注目される出来事があった。粕谷常吉編『房州に光を掲げた人々房州伝道百年小史』（聖公会出版 1973 年）によれば、安房のキリスト教宣教は、1897（明治 20）年頃より医師秦呑舟や笛木角太郎らによって朝夷郡健田村大貫で始まったのが、安房での宣教における原点である。とくに医師秦呑舟の強い影響力のもとで、大貫を中心に房総半島南端・安房地域の広範囲にわたった宣教活動を展開していった。講義所や集会所がつくられ、秦夫人のオルガン演奏では子どもたちが集まったという。後に佐久間吉太郎らの伝道で信徒が増え、安房大貫教会となっていく。明治末期から大正期において安房地域の漁村では、キリスト教宣教も重なり、病気や教育などの地域課題への問題意識が高まっていく。名取多嘉雄著『明治期における日本聖公会の千葉宣教』（三恵社 2011 年）には、明治 30 年代での安房の宣教資料が掲載され、とくに長尾村根本を訪れた宣教師たちによって、長尾村根本の姿や子どもたちの様子が報告されている貴重な内容である。

1903（明治 36）年、Ｖ．Ｈパトリックという宣教師が本部に提出した『千葉宣教に関する年次報告書』がある。そこには「…根本は北条の南　３、４里のところにある漁村…ここの住民の日常的活動の中で、比較的大きな部分を占め、また精力的である部分は、女性が担っているように見え…彼女たちは男たちより遥かに優れたダイバーであり、またスイマーであり…彼女たちは一年中、主として海に潜って、いろいろな種類の貝や海藻を取って生計を立てている」と村の女性たち（海女）の姿を述べている。そして、重要な記載が「…イマムラさんの２年間にわたる信仰深い証しによって生まれたものです。彼は、その当時、学校教師で、今は見習伝道師…」と書かれている部分である。『長尾村誌』にある根本尋常小学校教員名簿でこの人物をさがすと、らくと並んで「今村狷介」の名があり、「就任 明治 34 年９月」「退職 明治 36 年８月」「代用教員」とあった。キリスト教徒の教員として２年間あまり、根本の子どもたちの教育を担っていた。パトリックは「イマムラさんは、小学校の子供を集めて、福音の物語を教えました。多くの子供がそのメッセージを身に付けました。そして子供達は幼稚なやり方ではありましたが、キリストに従おうとしたのです。子供達はかなり強い妨害を受けました。小学校の校長と彼から唆された子供達の強い妨害を受けました。しかし、彼らは着実に進んで行きました」と報告している。

前述の『房州に光を掲げた人々』の「続編・キリストの証人たち」山田三郎（旧姓森三郎）証言のなかで苗字が「大西狷介」になっている教員は、今村狷介のことと思われる。山田は 1886（明治 19）年父森善九郎と母まつの二男として長尾村根本に生まれ、根本小学の時に爆発事故で手首を切断した。教えを受けた「大西」先生の話に心を惹かれたびたび訪ねたという。18 歳の時に洗礼を受け牧師を志すようになり、大阪三一神学校に進学したものの病気で中退し、帰郷後はキリスト教徒として裁判所の代書（司法書士）になったとある。

今村狷介が根本小の代用教員として在職していた２年間、ひでは５、６年生であり、今村からキリスト教の影響を受けたことは、その後の女学校進学に関係したかもしれない。パトリックは「…根本の西にある布良という大きな村では、人々が今キリスト教の集会を開くことを求めてい」るので、「光は広がりつつあ」り、「いまや少なからざる数にまで達した日本のクリスチャン教師のひと

りひとりが、イマムラさんが根本でやったように、その光を輝かすことになる」と述べている。

パトリック宣教師の後を継いだのが、ピーコックという女性宣教師である。1904（明治 37）年 1 月出版の「Japan Quarterly 第 30 号」に長尾村根本の宣教報告の要約が出された。「…根本は千葉県南部の大貫から 12 マイルから 14 マイル位のところにある村です。北部出身の或る学生が、教役者になる希望を持ちました。しかし、病弱な彼は太平洋岸の小さな漁村の学校の先生になりました。多くの抵抗にもかかわらず、子供達を集め、救世主について話して聞かせました。子供達は素晴らしい反応を示しました。私共はこの子供達に会いたいと思い、友人と二人で、この絵のように美しい村を訪ねました。数人の女の子と若い教師とが出迎え、魅力的な日本旅館で心からの歓迎を受けました。女性集会が午後２時から古い仏寺で開かれる予定でしたが、男性が現れただけでした。女性は一日中、浜と畑で忙しく働いているからです。これはこの地域の特徴なのです。まず、子供の集会をしました。こんなに興味の持てる聴衆に話をしたのは初めてでした。子供達はいろいろな学校の歌を歌い、聖語を唱えました。子供達は非常に敬虔で静かでした。祈りについて教えられると、子供たちは静かな場所を選び、ゲッセマネと名付け、しょっちゅうそこに行って祈っているのです。最近、先生が職を辞して、東京に向かった時には、子供達は先生の周りを囲み、涙を流して別れを惜しみました…」とピーコックは根本の人びととの交流からキリスト教宣教の姿を報告している。

二人の宣教師が取り上げている「今村狷介または大西狷介」は、後に日本聖公会において重要な人物となり、「大西狷介」は『日本キリスト教歴史大事典』（日本キリスト教歴史大事典編集委員会編集 教文館 1988 年）に掲載されている。1880（明治 13）年、新潟県高田の今村致和の４男として出生し、（大西姓になったのはいつかの記載はない）1903（明治 36）年青山学院中等部から東京高等商船学校に進学するも、同級生が遠洋航海で全員遭難した時に大病を患っていて乗船せず助かったとされる。２年後、新橋教会で受洗し、東京聖教社神学校（聖公会神学院）を卒業、中部教区では高田から始まり新潟市に定住して伝道後、聖公会中部教区の各地教会に献身し、後に聖公会中部教区第３代主教になった人物で、1966 年名古屋で没している。「清貧に甘んじたことから、アジアのフランシスコや良寛をしのばせる高僧として敬慕された」とあるが、根本で２年間、代用教員であったとの記載はない。

根本尋常小学校において代用教員の今村狷介の存在は、教師らくにとっても在学していたひでにとっても衝撃を与えたと思われる。当時の宣教師報告にあるように、子どもたちの教育活動や教師同士の交流に、それなりの変化があったはずである。前述したらくの教員経歴では、「就任 明治 33 年５月」「退職 明治 39 年３月」「訓導（専)」「備考 34 年５月代用教員　36 年９月専科教員」であり、今村は「就任 明治 34 年９月」「退職 明治 36 年８月」「代用教員」となっているので、らくが教員になった翌年に今村が着任し、退職した２年後の明治 36 年にらくは代用教員から専科教員になっている。この時期、前年の９月にリンが亡くなり、年末に源之助が田代ふくを後妻にし、明治 37 年に誕生した長男英雄を連れて、ふくは渡米していった。その後の明治 39 年 11 月には仲治郎が帰国する。

家族におこった出来事のなかで、31 歳になったらくは今後の生き方をさぐっていこうと、明治 39 年３月に小学校教員を退職し、根本を離れて東京での新しい生活を始めることになる。もう一度、裁縫技術を学び高めたいと思ったようだ。

年月日未詳であるが、らくが家族の誰かに宛てた書簡【50】であり、らくの転居や勉強のこと、そしてひでの学業について書かれている。「…私出京後はまづ（欠損）を訪問し、三晩ほど（欠損）寿

一方ニとまり、夫れより伊（欠損）直ニ貸間を捜索に参り（欠損）【中欠】（欠損）間と申のみニ（欠損）きもの、または暗くして勉学ニ堪へざる物のみにて、四五日馳けまはり、足も気も労れ、実ニ閉口仕り候、物見遊散処にてはなく暮らし居り候処、去る十一日英子始めて通学途中、ふと当家を見付け候て、喜び帰宅いたし候へば、直ニ借り受け、去る十三日移転仕り候、当日は土曜日にて英子の都合もよく、殊ニ青山よりは態々おとみ殿来られ、色々道具なと持来りて、心切ニ終日立ちはたらき呉れ、午後六時ごろ漸く落ちつき申候…」と転居先について報告している。「…家屋は新らしく、二階（私共ノ室）は六畳ニて、前は大きな植木やの庭を見はらし、後も高等師範より其他、下町と異り樹木沢山あり、目下は花之盛りニて、実ニ見事ニ御座候、間代は二円五十銭ニ御座候、今迄聞きし中にては一番安く候、大□（欠損）畳五十銭の割合ニ御座候…」と住居や周りの環境を喜んでいる。住所は「小石川区大塚窪町８番地 納所滋治」であった。

ひでの学業については「…開校以来よく勉強なし居り、夜分も十一時頃までなし、英学の出来る人居られ候へば誠ニ都合よく候、同人成績之義ニて候が、如何なる御都合にや、生徒一同へ披露せざる旨…目下は二学年ニ相成り、書物等も準備仕り候、本人勉強之義ニ付ては、不及ながら注意仕るべく候間、決して御案じ遊ばさるましく候…」と報告し、らく自身の進学のことは「…去る五日より新学期開業仕り候へ共…去る十一日より入学し日々通学なし居り候、時間は午前三時間丈けにて、余り脳もいためず、只今之処にては誠ニ面白く望みも有之候、女は六七人ニ御座候、業ニ懸ると何事も打忘れ、私には之上もなき職業ニ御座候、身体之為めには非常ニよろしく候、今勉□（欠損）中にてかくの次第なれば、成業□□（（欠損））如何ばかり□□（欠損）楽しく…」と、「私には之上もなき職業」といっているので、裁縫などを学ぶ学校に入学したと書かれているが、体験入学のようなもので正式の入学ではなかったのではないか。らくは学校というよりは、裁縫の仕事を始めたのかもしれない。ひでやらくの文言などからみて、1906（明治 39）年３月に教員を辞め、上京した４、５月頃、ひでが「二学年ニ相成」という時の書簡であり、二人で納所滋治宅の借間を見つけ、一緒に住むことになったことを報告している。

また、年月未詳で差出人と受取人不明の書簡がある。入学したい学校のことを報告しつつ、学費などの支援を願っている、らくと思われる書簡【69】である。そのなかの文言に「…兄上様には御帰朝以来…」とあるので、仲治郎が米国から帰国したのが 1906（明治 39）年 11 月 27 日であるので、この書簡は翌年の 1907（明治 40）年３月頃ではないか。「…実ニ私には身体之上にも此上なきよき職業ニ御座候、只今は本科之普通科と申へはいり候、同科は六ヶ月ニて卒業のよしニ御座候、其上は高等科も之あり候へ共、まづ右普通科六ヶ月学ひ候へば、一通りの道は覚へられ候よしニ御座候…」と入学している学校の様子を伝えている。「…上京後家を借るまでニ意外の費用を要し候ニ付、六ヶ月間の月謝丈け、即ち一ヶ月二円五十銭なれば、十八円ニ校費二円、〆二十円丈け御補助被下まじく候…」と月謝や校費の補助を願っているが、これらのことを東京にある裁縫関係の入学要項と重ねてみると、当時の「東京裁縫女学校」でないかと推察する。

らくは支援を受けても「…其外之費用は半日休みなれば内職（裁縫）にてかせぎつゝ学び候間、如何ニも相すみ不申候…写真器械は兄上様のも寿一のも之あり候間、来年の今頃は多少かせがれ申さんと存じ候…此外の費用ニ付ては、決して御心配相かけ不申候…」と強い決意表明をしているとともに、「…成業の（欠損）下は御免被下と申教ひ不申候、されば村方の人親るいにても御話し被下まじく候、三十路ニ余る今日までは苦労のみ相懸け、尚此上ニかくまた御心配相かけ候段、如何ニも相すみ不申候へ共、今後身が一生の生業ニ御座候へば、何卒何卒御助力被下度偏ニ御願ひ申上候…」と、「…三十路ニ余る今日までは苦労のみ相懸け…」と自省しながら、再び学びの実践の道を歩

きたいと訴える姿がある。

らくのその後については不明だが、倉田白羊から仲治郎宛ての 11 日付書簡【2】がある。「拝啓　御書面の條々一々了承仕候、専簡素を旨と致せるは、本間氏側にても元より望み居る処に有之候、荷物も直様本間方へ御差出シ之事、賛成之次第に御座候、無論廿日之式日前二日位に、到達シ候日取りにて願上候、不取敢用件のみ」という内容である。このなかの「…荷物も直様本間方へ御差出シ…廿日之式日前二日位に、到達シ」とは、誰の何の式の前に荷物を送るのかが不明である。書簡の「…専簡素を旨と致せるは、本間氏側にても元より望み居る処に有之候…」という部分が重要といえる。大島四郎著『安房の潮左為』（私家版・1983 年）から、これはらくの再婚相手が「本間」という人物であることがわかった。大島は「…仲治郎の妹のらくは北条（館山市）で女学校の裁縫の教師をしていたが、縁あって本間徳治郎と結婚した。本間にとっては後妻であった。本間徳治郎は気鋭俊敏の陸軍少尉として日清戦争（明治 27～28 年）に従軍して勇戦力闘、とくに牡丹江の戦いにおいては殊勲を立てて武名を天下にうたわれたが、この戦闘で敵弾をうけて左腕の機能をうしない傷痍軍人となってしまった。大尉で現役を退き、その後は永らく「偕交社記事」（陸軍将校の結社である偕交社の機関誌）の編集にあたっていた。陸軍士官学校では、のち総理大臣にもなった田中義一大将と同期で、卒業成績が上位であったために同期会などではいつも田中の上席にすわり、生涯にわたって「おれ」といい「貴様」と呼ぶ親交をつづけていたという。「偕交社記事」の仕事をやめた本間は館山に晩年の居をかまえて閑日月をおくっていたが、そのころ筆者は岳父仲治郎にともなわれて一度その家を訪れて、本間と会ったことがあった。このとき、その妻のらくはすでに他界し、本間はすでに古稀をすぎていたと思われる…本間とらくとの間には子がなかったが、本間には先妻の生んだ二人の男の子があった。その長男は筆者よりも五、六歳年長であった…」と書いている。

大島は実際に本間徳治郎と会っているので、らくとの再婚は間違いない。仲治郎の長男平野義雄が 1917（大正６）年に徴兵入営した際の餞別帳に本間の名前はないが、1919（大正８）年に義雄が渡米した際の餞別帳に名前があった。ということは白羊がひでと長男平吉を連れて館山・北条町に転居したのが、1917（大正６）年なので、らくは大正７年か８年に再婚したのであろう。